＃29 葉月　考古学から「平泉文化」を考える
奥州藤原氏の地域支配②―「人々給絹日記」が示唆すること⑴―

2016.8.1

◆意外な出土遺物によって、奥州藤原氏に係る人物名が判明している。即ち、「人々給絹日記」と書き出された墨書折敷によってである。政庁平泉舘と思われる柳之御所遺跡の井戸跡より出土。一緒に出土した「かわらけ」の年代から 12 世紀の 70 年代、即ち３代秀衡さんの時代に筆記されたと推定。

なお、折敷とは個人用の銘々盆・銘々膳ともいうべきもので、宴席で個人の前に置かれた。折敷は「かわらけ」・箸とともに一回使い捨てされた、不要になった折敷の板を墨書のメモ用に転用したものであろう。以下にその全文と性格を示す（入間田宣夫『都市平泉の遺産』より、原文は縦書きである）。

「人々給絹日記
　石川三郎殿　赤根一カサネ
　石川太郎殿　紺大目結
　　カサネタリ
　信寿太郎殿　赤根染青
　　綾　　カサネタリ
　小次郎殿　赤根染白　カリキヌハカマ
　　カサネタリ
　四郎太郎殿　赤根染白　カリキヌ
　　（カ）サネタリ
　橘藤四郎殿　赤根染白　アヲハカマ
　橘（藤）五　赤根染ウヘ一シタキは大〇〇（墨滅）
　　カリキヌハカマ
　瀬川次郎　赤根染綾一
　　カリキヌハカマ
　海道四郎殿　赤根染綾一
　　水干袴
　石埼次郎殿　赤根染綾一
　（以下は石川三郎殿・太郎殿の下位部に記載）
　大夫小大夫殿　紺大目結　〇〇
　　（ヒトエ一）（墨滅）」

ここに記された人々に支給すべき装束がリストアップされている。赤根（茜）染めを基調

とした絹の狩衣（かりぎぬ）・水干（すいかん）は武家の正装であった。ここ平泉舘で何か大切な儀式があり、それらの人々に正装を支給し参列させなければならない事情が生じていたのであろう。

この「日記」は彼らに支給すべき正装を用意する心覚え（メモ）として書付けられたもので、平泉舘内にあった衣服関係の工房（縫殿（ぬいどの）的なもの）に掲げられていたものか。「日記」が書かれた裏側には、大小の織物の寸法を記したメモが墨書されていたこと、また、この文字が出た井戸から糸車の部品、鯨尺（くじらしゃく）（裁衣（さいい）用）と思われる物差しが一緒に出ていることなどから、その可能性が強い。

そして、何らかの大切な儀式とは、嘉応（かおう）二年（1170）五月、秀衡の鎮守府将軍任命という大事件以外考えられない。

発掘調査によって文字のある資料が出土することは決して珍しくはないが、10 名以上の人名が記されたこの「日記」は極めて興味深い。次回以降、さらに詳しく検討しよう。